

## 目 次

会則改正に向けて 問題提起とお願い .....	1
日本中東学会第 22 回年次大会参加申し込み等について.....	5
アジア中東学会連合 (AFMA) 大会のプログラム決定.....	10
第 2 回中東学会世界大会 (アンマン) 派遣パネルについて.....	13
第 9 回公開講演会「中東と日本の間」報告.....	14
2005 年度第 3 回理事会報告.....	15
日本中東学会年報 (AJAMES) 編集委員会から.....	18
韓国中東学会第 14 回国際会議参加報告.....	19
日本における中東教育研究機関アンケート調査の実施.....	27
追悼 ダードさんのいないダマスクス (佐藤次高) .....	27
会員の異動.....	28
寄贈図書.....	30
2006 年度会費納入のお願い.....	31
事務局より.....	31

## 会則改正に向けて 問題提起とお願い

日本中東学会理事会は、来る 5 月の年次大会総会で「会則改正」を提案することを予定しております。それに向けて、今回はその骨子をお知らせし、会員の皆さまからご意見やご提案をいただきたく存じます。

私たちの学会は創立 20 周年を経て、これまで大きく発展してまいりました。この間、歴代理事会が会則の整備に努めてきましたが、これまでは細則の導入や理

事・会長の任期制限など、創立時に決められた会則に若干の手直しを加えるだけに留めてきました。後で述べますように、会費についても創立時に決められたまま、今日までずっと変わらぬ額で来ています。

20年の間に、会員数は2倍を超え、活動の量も質も大きく成長しました。年次大会の際の研究発表を見ても、最初の頃は報告数が一桁台で部会も1つでしたから、その変貌がよくわかります。国際交流も大きく発展しました。会則も、そのような変化に対応して適切なものにする必要があります。

しかし、その一方で、会則は学会運営の基本ですので、都合が悪いといってやたらに変えているようでは困ります。そこで、20周年を経た今回、徹底して見直しをおこない、今後の学会の発展を見通すことができるような改正をおこないたいというのが、今期理事会の一致した希望です。

また、改正のプロセスについても、今回は会員の皆さまと徹底した討論をして決めたいと思います。会員の総意を問う機会は年1回の総会だけです。重要な会則改正などのためには、臨時の大会を開くこともルール上は可能ですが、全国にいらっしゃる会員の皆さまにそれだけのために集まっていただくのも困難です。

そこで、これまでの理事会における数度にわたる討議、今回のこのお知らせ、それに対する皆さまからのご意見・ご要望・ご提案（2月末締切）それに基づく最終的な改正案の作成、同案の理事会での討議、そして5月の総会での提案と討議、という長いプロセスを経て、改正をおこないたいと思います。どうぞ、以下の提起をお読みいただき、忌憚のないお考えを事務局までお寄せください。

今回の改正は、「会則」そのものと、会則の細かな施行に関する「細則」の両方にわたります。改正の目的は、おおまかに分けて、5つあります。(1)学会の規模と活動に適合するように理事会を拡大する。(2)組織の現状に合致するよう会則に追加をする（国際交流委員会の明記など）。(3)手続き規定の不備を解消する（細則改廃規定の条項を加えるなど）。(4)会員規定の実情に合わない部分を変更する（特に休会規定）。(5)会費を財務の実情に合わせて値上げする。

以下では、もう少し詳しく、それぞれを説明いたします。

#### (1) 学会の規模と理事の人数

会員数は創設時と比べて2倍以上になり、学会活動も大幅に拡大してきました。現在、会員の中から50名の評議員を選出し、その中から9名の理事が選ばれております。国際交流一つとっても、過去20年の間に（日本の中東研究の国際的地位があがったという点からはめでたいことですが）業務が拡大の一途をたどっております。また、学会活動の柱の一つである『年報』も年2回の刊行となり、編集委員の皆さまにご尽力いただいているとはいえ、このところ、理事が編集委員長

を務める体制となっており、負担は増えております。公開講演会や中東研究文献データベースは学会の重要な社会貢献であり、やはり担当理事をおいて実行しています。理事会の負担が増えるということは、事務局の負担が増大することになりますので、近年は事務局担当校をお願いしづらい、という問題も生じております。

要務に合わせて理事会が推薦して、総会で認めていただく「特任理事」という制度もありますが、現在2名が通例となっています（現理事会は、合計11名）。学会内の民主主義を考えると、特任理事はあまり増やすことはできません。そこで、同規模の他学会などを調べたり（多いところは、同規模で25名の理事会があります）、業務量をいろいろと勘案しますと、選出理事数を13名に増やすのが合理的ではないかと思われまます。特任理事が2名であるならば、合計15名です（ちなみに、多数決原理の都合から言えば、数は奇数が好ましいと思います）。約1.5倍となりますので、かなりの戦力強化になるはずです。

評議員数は、理事数との兼ね合いで考えますと、現状を維持（50名）または増員（60名または70名）という選択肢があります。学会は会員の自治、という観点から言えば、会員増加に伴ってもう少し評議員が増えてもいいように思います。

## (2) 組織の合理化

最大の問題は、国際交流の活動が増大したため、3年前から「国際交流委員会」を設置したものの、現状ではこれが理事会内の委員会（つまり、理事の中の役割分担）にすぎないということです。アジア中東学会連合（AFMA）の設立をはじめとして、国際的な活動は増える一方です。これは、会員が国際的に活躍する場を確保する上でも有意義な活動です。そこで、編集委員会と並んで、委員を募り公式の委員会として位置づけたいと思います。

## (3) 手続き規定

これは学会活動の根幹には関わりませんが、法的な一貫性を確保するために必要です。現行の会則は、細則を定めながらも、それを改廃する規定を含んでいません。その条項を付け足し、また、その改廃を総会で行うことを明記します。

さらに細則の中に、海外からの会費の送金方法まで指定してありますが、金融活動が自由化している今日の実情に合いません。送金方法は、会員が都合に合わせて自由に決めればよいと思います。

## (4) 会員規定

細則では、日本人の会員が海外に長期滞在していると休会ができましたが、これは中東と連絡がとりにくかった時代の規定であり、休会にすると学会からの連絡がまったくいなくなるため、そのまま幽霊会員になってしまう場合があります。現在の国際化・インターネット時代にまったくそぐわない規定ですので、

この制度は廃止したいと思います。

#### (5) 会費の値上げ

正直に申し上げますと、今回の改正ではもともと会費の問題は考えておりませんでした。しかし、「10年ぐらい持ちこたえられる改正を！」を考えると、会費も細則の一部である以上、この問題を避けるわけにはいかなくなりました。

現状では、収支バランスは保っています。ところが、きちんと検討すると、このバランスはきわめて無理を重ねて持ちこたえてきたことが判明します。

まず、『年報』です。このところ、毎年科学研究費の出版助成をいただいて、ようやく収支全体がトントンの状態です。皆さまよくご存じのように、私たちの『年報』は第1号から「ワープロ版下による入稿」というような、20年前としては革新的な（あるいは時代の先を行き過ぎている）方法で、コストを最低限に抑えてきました。それでも、現行の会費収入では、助成金がなければ、ただちに100万円以上の赤字になるのが実態です。助成金は、毎年申請して採択されなければ手に入らないものですから、これを前提に予算を組むことはできません。

もう一つ大きいのは、事務局の人件費を抑えるために、さまざまな方に手弁当の奉仕をしていただいているという事実です。このことは収支バランスからはプラスですが、学会の活動規模に対応したアルバイト謝金を確保できなければ、今後、事務局を維持すること自体、困難になりかねません。事務局経費はどこの学会でも悩みの種で、そこから「学会事務センター」というような請負組織も生まれたわけですが、昨年そこが杜撰な経営で破産し、多額の被害を被った学会がいくつもありました。私たちの学会は、幸い『年報』の委託販売以外は頼んでおりませんが、一つの教訓は、学会事務は可能ならば自分たちでやった方がよいということです。そのためにも、健全な財政基盤は必要です。

もちろん、これは出版助成金などの外部資金を得ずにやるという計画ではありません。申請はきちんとしていきます。しかし、それがないと赤字になるという状態は避けたいものです。また、最近の傾向として、外部の助成金は自己資金があるのを前提に補助するタイプが多く、かつてのように丸々助成してもらえることはほとんどありません。また、現在は賛助会員がゼロになってしまいましたが、他の学会をみても、特別な例を除けば、賛助会員に多くを期待できないのが実情のようです。

値上げするとしたらいくら、というのは悩ましいところです。長期的に考えて、正会員12,000円、学生会員6,000円という案もあります。いまどき正会員8,000円は安すぎるという議論です。しかし、一気に5割増しは高すぎるという意見もあります。正会員10,000円、学生会員5,000円が穏当だし、それなら、たいていの学会と同額ではないかという考え方です。

近年の支出総額は600万円を超えています。試みに本年度総会時の会員数で

会費収入を計算してみると、年会費が正会員 10,000 円、学生会員 5,000 円になれば、年間会費収入は 5,960,000 円（正会員 520 名 520 万円、学生会員 152 名 76 万円）となり、長期的に見て会費収入だけでも収支を均衡させることができます。

まだ、議論は尽きていません。このあたりは、自分たちの会費で自分たちの会を賄うという原則と、財布との相談ですので、皆さまの率直なご意見を賜りたいと思います。

本会は、設立当初に運転資金となる基金がなく、以来会費前納制によって運営を維持してきました。そこで値上げをする場合、いつからかが問題になりますが 2008 年度分から実施することが事務的にみて混乱が少ないと考えています。また、長期的に考えた場合、事務的にはいささか複雑な前納制をやめるという選択肢もありますが、それには 1 年分の学会活動を繰越金としてキープできるようにする必要があります。

財政状況については、事務局が作成した説明資料を別に添付いたしますので、そちらをご覧ください。

以上、会則および細則の改正へ向けた骨子を説明いたしました。私たちが気がついていない点、あるいはこれまでにないユニークな提案など、会員の皆さまがお考えのこともあると思います。是非ご意見、ご提案をお寄せください。メールで、2 月末までに事務局までお送りいただければ幸いに存じます。できれば、メールの題名の冒頭に「会則改正：」とお入れください。よろしく願い申し上げます。  
(会則改正担当理事 小杉 泰)

## 日本中東学会第 22 回年次大会参加申し込み等について

### 参加および懇親会申し込みについて

ニューズレター 105 号でお知らせしましたように（学会ホームページにも掲載されています）本号ニューズレターには、日本中東学会第 22 回年次大会への出欠通知、懇親会・弁当（昼食）の申し込みを兼ねた郵便振替用紙が同封されています。大会に参加される方はこの振替用紙をご利用の上、4 月 10 日（当日消印可）までに参加費をお払いください（研究発表希望の方の参加費納入締切は、後述のとおり、これより早く 2 月末日です）。また、懇親会費、弁当代などの納入も同封の振替用紙をご利用ください（託児所への寄付については 10 ページをご覧ください）。

参加費は同時開催の AFMA 大会参加費も含めて 2,000 円、懇親会費は 5,000 円

(学生会員は4,000円) 弁当代は800円です。

4月10日までにお払いいただけなかった場合、弁当以外はその後(大会当日も含む)も受け付けますが、参加費・懇親会費ともそれぞれ1,000円上乗せし、参加費3,000円、懇親会費6,000円(学生会員5,000円)とさせていただきます。なお、事前にお振込みいただいた諸費用は返却に応じかねますので、その点もご注意ください。

### 研究発表受付に関して

大会研究発表(AFMA分は除く)の受付に関しましては、12月12日午後に実行委員会を開催し、その時点で申請されていた32名の方々の発表を承認することに決定いたしました。積極的なご応募にお礼を申し上げます。

実行委員会では大会2日目の暫定的なプログラムを別表のように作りました(初日のプログラムは10~11ページをご覧ください。AFMA実行委員会による企画です)。ただしこれは発表タイトルを含めあくまで仮のものでして、今後発表予定者の都合などにより、若干の変更がなされる可能性があります。現時点で、ご参考までにお知らせします。

なお、最終的なプログラムと会場近郊のホテル案内、出張依頼状、総会議決の委任状などは3月下旬にお手もとにお届けする予定です。

### 日本中東学会第22回年次大会暫定プログラム(2日目)

#### 第1会場

- 9:30-10:10 (1-1) 今堀 恵美(東京都立大学大学院)  
「カシュタ(刺繍)が形成する社会ネットワーク ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区を事例に」
- 10:15-10:55 (1-2) 河原 弥生(日本学術振興会特別研究員)  
「コーカンド・ハーンの系譜書 母系サイドの検討」
- 10:55-11:10 コーヒーブレイク
- 11:10-11:50 (1-3) 勝沼 聡(東京大学大学院)  
「近代エジプトにおける社会政策の一断面」
- 11:55-12:35 (1-4) 大河原知樹(東北大学)  
「イスラム法廷史料研究上の諸問題」
- 12:35-14:00 昼食
- 14:00-14:40 (1-5) 小笠原 弘幸(日本学術振興会特別研究員)  
「オスマン朝起源伝承について」
- 14:45-15:25 (1-6) 宮下 遼(東京大学大学院)

- 「オスマン詩人のイスタンブル 16世紀都市頌歌に見るイスタンブル観」
- 15:25-15:40 コーヒーブレイク
- 15:40-16:20 (1-7) 高畑 祥子 (東北大学大学院)  
「ロバート・カレッジ学長の手記から見るミッシヨナリーと政治」
- 16:25-17:05 (1-8) 原山 隆弘 (東京大学大学院)  
「イスファハーニー著『弱さの救い Nusrat al-fatra』について」

## 第2会場

- 9:30-10:10 (2-1) 長岡 慎介 (京都大学大学院)  
「現代イスラーム金融における金融手法の考察 ムダーラバ契約、ムラーバハ契約を中心に」
- 10:15-10:55 (2-2) 飯山 陽 (東京女子大学非常勤講師)  
「ファトワーにみる公益または公共善としてのマスラハ」
- 10:55-11:10 コーヒーブレイク
- 11:10-11:50 (2-3) 外山 健二 (筑波大学大学院)  
「ポール・ボウルズのフランスからモロッコ シュールレアリスムと民族誌学」
- 11:55-12:35 (2-4) 前田 君江 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員)  
「1946年 ソ連・イラン文化協会 作家会議に見る文学史的諸相」
- 12:35-14:00 昼食
- 14:00-14:40 (2-5) 大川 真由子 (日本学術振興会特別研究員)  
「アフリカ系オマーン人に見るアラブ性」
- 14:45-15:25 (2-6) 縄田 浩志 (鳥取大学)  
「スーダン東部、ベジャ族の適応機構と歴史的生存」
- 15:25-15:40 コーヒーブレイク
- 15:40-16:20 (2-7) 小杉 麻李亜 (立命館大学大学院)  
「文化装置的アプローチからみたクルアーン エジプトおよびインドネシアにおける人類学的調査から」
- 16:25-17:05 (2-8) 西尾 哲夫 (国立民族学博物館)  
「誰がために乳房はゆれる ベリーダンスをめぐる身体と言語の現代的変容」

## 第3会場

- 9:30-10:10 (3-1) 関口 陽子 (東京大学大学院)

- 「トルコの民族主義者行動党（MHP）軍事訓練キャンプの虚像と実態 1960年代後半から70年を中心に」
- 10:15-10:55 (3-2) 米山 知子（総合研究大学院大学大学院）  
「現代トルコにおけるアレヴィーの宗教舞踏セマーの展開」
- 10:55-11:10 コーヒーブレイク
- 11:10-11:50 (3-3) 宮澤 栄司（上智大学アジア文化研究所客員研究員）  
「強制移住から定住へ トルコのチェルケズ人」
- 11:55-12:35 (3-4) 丸山 英樹（国立教育研究所）  
「EU加盟問題とトルコの教育改革」
- 12:35-14:00 昼食
- 14:00-14:40 (3-5) 坂梨 祥（日本エネルギー経済研究所）  
「フェダイヤーネ・エスラムと「神の正義」 今日における再評価とその意味」
- 14:45-15:25 (3-6) 松永 泰行（同志社大学一神教学際センター フェロー）  
「比較視座におけるイラン国家 民主化論、世俗化論との関わりにおいて」
- 15:25-15:40 コーヒーブレイク
- 15:40-16:20 (3-7) 岩崎 葉子（アジア経済研究所）  
「イランにおける商事賃貸借法制」
- 16:25-17:05 (3-8) 米田 憲市（鹿児島大学）  
「イラン・イスラム共和国における法意識 分析結果の多国間比較から」

#### 第4会場

- 9:30-10:10 (4-1) 錦田 愛子（総合研究大学院大学大学院）  
「ヨルダン系パレスチナ人におけるディアスポラ・アイデンティティの現状」
- 10:15-10:55 (4-2) 飛奈 裕美（京都大学大学院）  
「インティファダ期東エルサレムのパレスチナ社会における子どもの学校生活と抵抗運動」
- 10:55-11:10 コーヒーブレイク
- 11:10-11:50 (4-3) 富永正人（東京外国語大学大学院）  
「現代標準アラビア語の語末母音の脱落について アル・ジャズィーラのニュース放送を題材に」
- 11:55-12:35 (4-4) 横田 貴之（日本国際問題研究所）  
「現代エジプトにおける民主化とムスリム同胞団」



- 12:35-14:00 昼食
- 14:00-14:40 (4-5) 鶴見 太郎 (東京大学大学院)  
「シオニズムの歴史社会学 ロシア帝国とナショナリズム」
- 14:45-15:25 (4-6) 小島 宏 (国立社会保障・人口問題研究所)  
「欧州在住ムスリムと移民に対する態度」
- 15:25-15:40 コーヒーブレイク
- 15:40-16:20 (4-7) Abdul Latif Zoya (首都大学東京大学院)  
“The shaping factors of the rapid urban change in the eastern sector of old Saida (Lebanon)”
- 16:25-17:05 (4-8) 飯野 りさ (東京大学大学院)  
「1950-60年代のレバノンのスケッチャート 音によるアイデンティティ形成の一例」

### 研究発表予定者の方へ

前号ニューズレターでお知らせしましたように、発表予定者の方は2月末日までに、発表要旨原稿(詳細は以下)の提出と参加費の振込みをお願いいたします。期日までにこの2条件が満たされないときには、発表をお断りすることがありますのでご注意ください。

#### 〔発表要旨執筆要綱〕

1. 要旨は大会当日配布される要旨集に掲載します。
2. 分量は、和文 1,000 字、英文 350 words 以内とします。
3. 日本語の発表には必ず英文要旨もつけてください。
4. 和文、英文とも題名、名前、所属、要旨本文の順序で書いてください。ただし、所属の書き方等、書式は統一性を保つため、こちらで編集する場合があります。フォント、行数等についてもこちらで決定します。
5. 英文のブラッシュアップ、ネイティブ・チェックは大会実行委員会では行いません(簡単なスペルミス等を除く)。各自の責任で行ってください。
6. アラビア語転写などの特殊文字は用いないでください。
7. 書式なし(=シンプル)テキスト・ファイルで、E-mail に添付して、大会事務局アドレス([jameet@aa.tufs.ac.jp](mailto:jameet@aa.tufs.ac.jp)) に2月末日までにご送付ください。

### 託児所設置とそれへの寄付に関して

今回からの初の試みとして、託児所を設置する件に関しましては前号のニューズレターでお知らせしました。すでに数人の方からお問い合わせがありました。ご検討中の方もいらっしゃるものと思われませんが、どうか気軽に担当者へお問い

合わせ下さい。

担当者：山下王世

電子メール：kim.yy@tufs.ac.jp

ファックス：042-330-5599（東京外国語大学研究協力課気付・山下王世宛と明記してください）

なお、本件に関してですが、ある会員の方から、自分は託児所を利用しないと思うが、この試みが今後も存続することを希望して寄付をしたい、というお話がありました。確かに今回提案している方式では、利用者数が少なければ利用する方の自己負担額が増し、それが実際の利用を躊躇させるという悪循環にもなりかねません。それが続くと、この試みも「利用者がいないため」に継続されなくなる可能性があります。

そこで大会実行委員会としては、託児所利用者の方の自己負担金（利用人数等が決まってから決定します）とは別に、託児所設置に関わる寄付を受け付けることにしました。同封の振込用紙の入金欄に、参加費などと別に「託児所への寄付」という欄があります。寄付ご希望の方はその欄をご利用下さい。金額の多少は問いません。

なお寄付としていただいた金額は、年次大会運営とは別会計に回し、託児所利用者の負担減の目的にのみ使わせていただきます。そして大会終了後、託児所に関する会計は独立して、会員の皆さまにご報告したいと思います。

（第22回年次大会実行委員長 大塚 和夫）

## アジア中東学会連合（AFMA）大会のプログラム決定

2006年5月13-14日の中東学会年次大会と並行してAFMA大会が開催されますが、発表は9月末、ディスカッサントは12月末の締切までに、国内国外から多数のご応募をいただきました。

それをもとにまとめられたAFMA大会のプログラムは、以下のとおりです。

**Tentative Session Programme dated December 2005**

**“Middle East Perspectives from East Asia: Diversifying the Middle East and Islamic Studies”**

First Day (May 13)

**Open Panel: The Evaluation of Asian Diplomatic Policies: The Middle East:**

### **Experience in Japan, Korea, and China**

KATAKURA Kunio (ex-Ambassador of Japan to Iraq and to Egypt)

YANG Guang (Institute of West-Asian and African Studies, Executive president of Chinese Association of Middle East Studies)

SUKHRAGCHAA Nyamzagd (Institute of Commerce and Business)

Other panelists (to be announced)

Second Day (May 14):

#### **Session 1. Urban Non-Elites in Middle Eastern Societies: Three Case Studies from Istanbul and Cairo between the 17th and Early 20th centuries**

Chair: NAGASAWA Eiji (University of Tokyo)

Panelists: AKIBA Jun (Chiba University)/ Hanan KHOLOUSSY (New York University)/ YI Eunjeoung (Seoul National University)

#### **Session 2. Middle Eastern Literature(s): From East Asian Perspectives**

Chair: OKAMOTO Kumiko (Osaka University of Foreign Studies)

Panelists: FUKUDA Yoshiaki (Lecturer at Osaka University of Foreign Studies)/ KIM Jeong A (Hungkook University of Foreign Studies)/ SONG Kyung Sook (Hungkook University of Foreign Studies)

Discussant: OKAZAKI Hideki (International Buddhism University)

#### **Session 3 . Comparative Studies on the Social Value in the Middle East and East Asia**

KURODA Yasumasa (University of Hawaii at Manoa) / SUZUKI Tatsuzō (Institute of Statistical Mathematics), “East and West Asian and Western Values and Their Structures: An Empirical Assessment”

KIM Jong-Do (Myongji University), “Comparative Studies on Proverbs of Koreans and Arabs– Emphasizing on their views of lives– ”

#### **Session 4. The Middle East and East Asia in Global History**

Michael PENN (Kita Kyushu University), “Meiji Japan and Qajar Persia, 1880-1914”

MARUYAMA Naoki (Meiji Gakuin University), “Three Asian Nations Support the Zionist Movement”

SAMDANDASH Oyunsuren (National University of Mongolia), “The History of Islam in Mongolia and Some Current Issues”

HUANG Minxing (Northwest University), ““Pax Islamica” and “Order of China and

Foreign Countries”: The Relations between Abbasid Empire and China in the Tang Dynasty”

#### **Session 5. Trade and Economy in the history of the Middle East**

SHIM Ui Sup (Myongji University), “Trade and Travel between Middle East and East Asia with respect to the Indian Ocean”

MATSUI Masako (Lecturer at Keio University), “Sadık Rifat Paşa and his Economic Thought – In the shadow of Free Trade Treaties in the mid-nineteenth century”

GANTUMUR Munkhnasan (Institute of Commerce and Business), “The Issue Current Relation between Mongolia and Middle East”

WANG Lincong (Institute of West Asian and African Studies, Chinese Academy of Social Sciences) “Clashings and Communication: the Talas War between the Tang dynasty and the Arab and the spreading of Chinese papermaking technology to the West”

#### **Session 6. Nationalism and Ethnicity in the West Asia**

OBA Ryuta (Kyoto University), “Another Dimension of Kurdish Nationalism: The Case of Said Nursi”

PUREV Lkhagvasuren (Ministry of Education, Culture and Science, Mongolia), “Customs specifications of heap ceremony of Khoton ethnicity of Turkish origin Nations in Mongolia”

#### **Session 7. Islamic Movements, Civil Society and Democracy**

SAWAE Fumiko (Lecturer at Osaka University of Foreign Studies), “Islamic movements and their civil/ public dimensions”

JANG Ji-Hyang (Hankuk University of Foreign Studies), “Islam and Liberal Democracy in the Globalization Era: The Political Implications of Islamic Capitalism in Turkish Muslim Democracy”

ZHANG Xiaodong (Institute of West Asian and African Studies, Chinese Academy of Social Sciences), “The Democratization in the Middle East after 9-11 Attack”

XIAO Xian (Yunnan University), “The Islamic Linkage between the Middle East and Southeast Asia”

#### **Session 8. Gender in the Middle East**

GOTO Emi (University of Tokyo), “Popular Preachers and the Hijab: Reasons Behind the “New Veils” in Contemporary Egypt”

CHO Hee Sun (Myongji University), “A Study on Women’s participation in New Media

and its Influences on Social Changes in Gulf Region – focused on Satellite TV –”  
Discussant: Dr. ADELKHAH Fariba (CERI)

皆さま、当日は積極的にご参加ください。

また、報告者の方々は、AFMA 東京大会実行委員会からの連絡に従って、期日までに報告要旨などの必要事項をご提出ください。

【連絡先】 日本中東学会国際交流委員会 AFMA 東京大会実行委員会  
E-mail: afma2006may@yahoo.co.jp  
FAX: 042-330-5543

( AFMA 東京大会実行委員長 酒井 啓子 )

## 第 2 回中東学会世界大会 ( アンマン ) 派遣パネルについて

日本中東学会は国際交流事業の一環として、ヨルダン・ハーシム王国の首都アンマンにおいて2006年6月11日から6月16日まで開催される第2回中東研究世界大会 ( The Second World Congress of Middle Eastern Studies: WOCMES-2 ) に「中東をめぐる三者間対話の構築 Constructing Trilogue around the Middle East」という研究テーマの下、日本、中東、欧米を含む中東研究者を派遣、総合部会を構成して研究発表と討議を行う予定です。このテーマの趣旨は、東洋と西洋という二者間の対話 ( dialogue ) を相対化する、三者間対話 ( trilogue ) の構築を主題にして、今日的な課題に応える複眼的中東研究の提唱と、これに日本の研究者が果たす積極的な貢献の可能性を示し、新たな対話を通じた中東研究の国際共同研究プログラムの可能性を探ることです。それにより、グローバル化の進む現代における地域研究一般のあり方や、さらには人文社会科学そのものの枠組みまでも再考するきっかけとしたいと考えています。

上記の研究テーマの下に 1 会場を 2 日間にわたって使用し、3 部からなる総合部会を構成します。第 1 部「農村研究の新地平 社会科学とコミュニティスタディ エジプトを事例に」では加藤博会員 ( 一橋大学教授 ) を代表者とする科学研究費補助金による共同研究に基づいて地理情報システム ( GIS ) を活用し、日本の研究者とエジプト政府統計局が協働するエジプト農村研究への新しい取り組みを紹介し、第 2 部「『極東』から中東への新しい視線 21 世紀東アジアにおける中東研究の動向」では臼杵陽会員を中心に、三浦徹会長、李熙秀韓国中東学会会員 ( 漢陽大学校教授 )、平成 13 年度まで学術創成研究「イスラーム地域研究」を

率いた佐藤次高会員（早稲田大学教授）らにより日本および韓国における中東研究の最新の動向を、大規模研究プロジェクトの紹介と、文学、思想、社会学など諸分野の対話型発表を通して多角的に示します。第3部「流派と教団 タリーカ再考」では、赤堀雅幸会員を代表者とする科学研究費による共同研究に基づき、前回大会以降の海外からの高い評価にも応えて、思想研究、人類学、歴史学の協力によるスーフイズムの現代的再考の研究成果を示します。加えて、これも第1回大会において大きな反響を呼んだことに考慮し、日本中東学会のブースを会場に設置して、日本における中東研究の出版物を展示し、今後の研究協力の可能性を探ります。

大会を主催する WOCMES 委員会は、世界大の研究者ネットワークを中核に、各国の中東学会が関わって運営されており、今大会に関してはヨルダン王立宗教学研究所が開催実務を担当し、同国王家および文化省の支援を受けます。公式には上記の三部会が受け入れ審査中です。なお、現在、本国際交流事業は日本中東学会として国際交流基金・知的交流会議助成プログラムに助成を申請中です。

（国際交流委員長 臼杵 陽）

## 第9回公開講演会「中東と日本の間」報告

2005年11月5日（土）の午後、明治大学リバティホールにおいて、日本中東学会主催第9回公開講演会「中東と日本の間」が開催された。このタイトルには、日本と中東の間に培われてきた交流の歴史を振りかえり、それにより、現在の日本に充満する「なんとなく怖い中東」という空気を払拭しよう、というオーガナイザーの気持ちがこめられていた。そして、ご講演いただいた3講師の話はどれも、中東から日本へ、日本から中東へとさしのべられてきた手のぬくもりを感じさせる、楽しいものであった。当日会場を訪れた学生・一般の参加者のみなさんも、中東とつきあうこと、中東を学ぶことの楽しさを感じてくれたにちがいない。

小松香織「トルコにおける親日観の源流」は、世界有数の親日国といわれるトルコの「親日」観が、実は、オスマン帝国以来かわることのないステレオタイプ化した日本人像に支えられたものであること、そしてそれが社会の諸相の人々にとって共通の、都合のよい「理想」であったために、色あせることなく支持されつづけてきたことを諸資料を通じて示す。「日本人は民族文化を何一つ失わずに西洋に追いついた」というズィヤ・ギョカルプの賞賛は、いままも私自身、繰り返しトルコの人たちに向けられる言葉である。つい苦笑いしてしまうその賞賛が、

トルコの多くの人の理想の裏返しであることはいうまでもない。

素朴な誤解に満ちたイメージは、日本人が中東に対して抱いてきたものでもある。西尾哲夫「アラビアンナイト（千夜一夜物語）と日本人の中東幻想」は、月の砂漠にはじまり、ディズニー・アニメにいたるアラビアンナイト的世界が、日本にいかに定着してきたかを、美しいスライドとともに示す。

そして、小杉泰「文明の相互認知と政治・経済関係：21世紀の日本と中東」は、政治・経済の世界で、中東が日本に与えてきたショックの大きさをたどり、その上で、遠い日本から中東地域の固有性を理解することの苦勞と喜びを語る。しかし小杉によれば、その苦勞と喜びはもはや日本だけのためのものであってはならない。中東と語れる日本の存在は、ともすれば二元論的対立にはまり込む国際社会を、鼎談の構図にもちこむために不可欠な要素となってきたのである。その責任は重いと。

各講演に対しては、会場から多くの質問もよせられた。実り多い催しものの開催にご協力いただいた明治大学に感謝します。（林 佳世子）

\* \* \*

### 第9回公開講演会「中東と日本の間」

日時：2005年11月5日（土） 午後2時～6時

場所：明治大学リパティホール（リパティタワー1013教室）

講演者：小松香織（筑波大学大学院人文社会科学部研究科助教授）

「トルコにおける親日観の源流」

西尾哲夫（国立民族学博物館助教授）

「アラビアンナイト（千夜一夜物語）と日本人の中東幻想」

小杉泰（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

「文明の相互認知と政治・経済関係：21世紀の日本と中東」

司会：林佳世子（東京外国語大学外国語学部教授）

\* なお、本講演会は、平成17年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費による補助をうけて、開催されました。

## 2005年度第3回理事会報告

11月5日に2005年度第3回理事会が開催され、以下のことが討議・決定されました。

日時 2005年11月5日(土) 10:00~14:00

場所 明治大学リバティタワー6階 1062教室

出席 三浦徹会長、赤堀雅幸、飯塚正人、臼杵陽、小杉泰、小松久男、酒井啓子、  
長沢栄治、林佳世子の各理事  
事務局より宇野陽子会員

欠席 加藤博、栗田禎子の各理事

## 議題

### 1. AJAMESの編集について ( 18~19 ページに関連記事)

- ・ 21-1号は予定より若干遅れて刊行された。現在は来年2月の刊行を目指して、21-2号の編集を進めている。
- ・ 2006年度に開催されるAFMA第6回大会のパネル、WOCMES第2回大会への学会派遣パネルの成果は22-2号以降で特集したい。それ以外の企画も募集中で、引き続き投稿、特集企画の提供をお願いする。特に外国語原稿を期待している。
- ・ 2003年度から3年間にわたって編集長を務めてきた長沢理事は本年度いっぱい編集長職を離れ、来年度から林理事(現副編集長)が編集長に就任する。06年2月頃から新編集体制に移行する予定。
- ・ AJAMESの外国人編集委員として、CAMES、KAMESの会員に加わってもらう方向で交渉を進める。

### 2. 国際交流委員会の活動について

#### 2.1 AFMA第6回大会の準備 ( 10~13 ページに関連記事)

- ・ 9月末日をもって報告希望の受付を終え、実行委員会で暫定的にこれを8つのパネルに取りまとめた。現在は12月末日締切で、6つの自由企画パネルのディスカッサントを募集中。
- ・ 初日の公開シンポジウムについても、中国、モンゴル、日本からのパネラーは確定済みだが、韓国は未定。
- ・ 大会開催時に開かれるAFMA理事会に向けて、プサン大会時にJAMESが提示した規約整備案を予め加盟各国学会に連絡する。

#### 2.2 WOCMES第2回大会の準備 ( 13~14 ページに関連記事)

- ・ 7月末日締切で、パネルやラウンドテーブルの予定や提案、個人研究発表の予定などを連絡するよう、会員に依頼していたところ、6つのパネル提案があった。この中から学会としての派遣パネルを選定する。



- ・ パネル派遣のための資金は、12月1日締切で国際交流基金が募集している助成プログラムに応募する（応募済）。
  - ・ WOCMES 第2回大会においても、本学会からブースを出す。
3. 2006年度公開講演会計画について
- ・ テーマは「日常のなかに中東を掘り起こす」とし、第1回は「教育現場の中での中東・イスラーム」をサブタイトルに、全国歴史教育研究大会（7月26-27日、鬼怒川温泉）の前日、7月25日（火）に明治大学で実施する。また、第2回は「地方における中東・イスラーム」をサブタイトルとして、11月18日（土）に山口市民会館Bホールで開催する。なお、第1回・第2回とも、科学研究費補助金による助成を申請する（申請済）。
  - ・ 今後は年次大会で「教育現場における中東」について発表するようなセッションも検討していきたい。
4. 新学術会議の発足について
- ・ 第20期日本学術会議が発足し、地域研究委員会が設置された。本学会の会員では小杉・酒井両理事が同委員会の委員となっている。地域研究のプレゼンスは強化された。なお、中東学会は「日本学術会議協力学術研究団体」登録の呼びかけに応じ、同団体として登録済み。
  - ・ 中東学会理事会としては、新しい地域研究委員会と協同する一方、地域研究学会連絡協議会においても積極的な役割を果たして行く。
5. 日本中東学会奨励賞について
- ・ 審査対象と授賞頻度を中心に審議したが、結論が得られず継続審議となった。
6. 会則改正案について（1~5ページに関連記事）
- ・ 学会組織強化のため、前期の理事会から持ち越されている改正案の審議については、1月発行のニューズレターで会員への概要報告と意見募集を行い、3~4月にかけて第2次案を理事会で討議、最終案を5月年次大会時の理事会で確認し、総会に提案する。骨子は以下のとおり。
  - ・ 選出理事の定員を現行の9名から13名に拡大する。
  - ・ 会費を正会員10,000円、学生会員5,000円に値上げしたい。本学会の会費は発足当時から変わっていないが、20年間に会員数は倍増、学会活動は国内外で拡大し、その事業予算は、外部資金（科研費）の獲得などによって補ってきた。しかし、これらの活動を支える事務局の経費は据え置かれており、長期的展望にたって、見直す時期にきているため。
7. 会員動向
- ・ 退会希望者4名について退会が承認された。
8. 2006年度年次大会準備報告（5~10ページに関連記事）

- ・ 2006 年度年次大会の準備は、会場等の手配も含め順調に進んでいる。
- ・ 前回理事会で提案のあった「年次大会準備のための学会マニュアル」原案はすでに学会事務局で作成し、来年度年次大会の準備もこれに従って進められているが、現実に使用してみると修正を迫られる点多々あることから、最終案を理事会に諮るのは次回（年次大会開催時）とする。再来年度以降の年次大会を準備する際には、担当校にこれを活用していただきたい。

## 9. その他

- ・ 中東研究文献データベースの更新頻度が増え、経費もかかるので、平成 18 年度はあらためて科研費を申請する。計画調書原案を作成された後藤敦子会員に感謝の意を表したい。
- ・ 国際交流基金から依頼のあった「日本における中東研究の委託調査」については、日本における中東研究教育機関の調査、中東での日本関係出版物の調査に限定し、前者は三浦会長、後者は林理事が主管で話を進める（すでに委託をうけ調査を実施中。 27 ページに関連記事）。

## 日本中東学会年報（AJAMES）編集委員会から

### 1. 第 21-2 号の刊行予定

編集委員会では現在『日本中東学会年報』（AJAMES）第 21-2 号の刊行を目指して編集・校正作業を行っています。当初 2 月刊行を予定していましたが、諸般の事情から 3 月刊行の見込みです。特集は Sufism and Tariqa Movements in the Era of Islamic Resurgence（取りまとめ：東長靖会員）ほかを予定しています。

### 2. 第 22-2 号原稿募集と投稿締切

すでにお知らせしていますように、本誌の刊行時期・投稿締切が変更になりました。年度第 1 号（第 22-1 号）はすでに昨年 12 月に投稿が締め切れ、今年 6 月刊行の予定で原稿審査過程に入っています（2 月初旬に編集委員会開催予定）。次の第 2 号（第 22-2 号）は、6 月 20 日が投稿締切で、12 月に刊行となります。論文のみならず、書評など他のジャンルでの投稿も大いに歓迎いたしますので、ふるってご寄稿いただけますようお願いいたします。

### 3. 博士論文要旨などの寄稿・企画提案のお願い

次回刊行予定の第 21-2 号では、日本の中東研究の内容を国際的に発信するために、会員の博士論文の英文要旨を掲載する新コーナーを設置し、7 名の方からご寄稿をいただきました。22-1 号以降も引き続き、同様のコーナーを設置する予定

ですので、ぜひご寄稿をお願いしたいと思います。その他、研究情報や特集の企画など積極的な投稿や提案を歓迎いたします。

#### 4. 編集長の交代と投稿先住所の変更

これまで年報編集委員会の委員長を務めてきた長沢は3年の任期を終えて、この3月末で編集長の職務から退くことになり、後任を林佳世子副編集長が務めることが理事会で決定されました。したがって4月以降、本誌への投稿先・連絡先は林新編集委員長の勤務先住所に変更となりますのでよろしく申し上げます。4月以降の投稿先・連絡先は以下のとおりです。

##### 【新投稿・連絡先住所】

〒183-8534 府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学外国語学部 林佳世子研究室気付

日本中東学会年報編集委員会

FAX：042-330-5347

電子メール：[hayashik@tufs.ac.jp](mailto:hayashik@tufs.ac.jp)

(日本中東学会年報 (AJAMES) 編集委員長 長沢 栄治)

### 韓国中東学会第14回国際会議参加報告

2005年10月14-16日に、韓国中東学会(KAMES)主催の国際会議“The Middle East at the Crossroad of Change”がソウルの明知大学 Myongji University において開催された。KAMESでは年2回の大会があり、春は国内集会、秋は英語を共通語とした国際集会を行っている。毎年JAMESには国際集会の案内があり、会長をはじめ数名が参加している。今回の第14回大会では、5月に発表者募集の連絡があり、これまでとは異なり、AFMA(アジア中東学会連合)加盟団体からは各国5名まで発表者の滞在費を負担するというものであった。学会メーリングリストで公募を行ったところ、わずか1週間のあいだに6名の応募があり、急遽応募を締め切った。発表応募者はいずれも若手の研究者で(中村覚、末近浩太、飯山陽、辻上奈美江、アレズ・ファフレジャハーニー、佐藤紀子)これに加えて学会理事会から三浦徹(会長)、臼杵陽(国際交流委員長)、飯塚正人(事務局長)が参加した。

会場となったのは、Lee Jong Tarek KAMES会長が所属する明知大学で、近年急成長を遂げている私立大学である。Lee教授は同大学の人文学部学部長、アラブ学科主任、かつ中東政治・社会研究所所長を兼ねる。大会期間は3日間であ

るが、通常、初日は韓国国内研究者によるワークショップで夕方に国外からの参加者を招いての夕食会が開かれる。研究発表は2日目の朝から夕方まで行われ、3日目はオプションでの市内ツアーとなっている。

初日の夕食会は、なんと中国料理店で行われた。約30名が自己紹介をするうちに、前年のプサンでのAFMA大会とはちがう雰囲気を感じた。海外からの参加者がいわゆる大物の招聘者だけでなく、米国のパレスティナ人、中央大学に着任したばかりのカナダ人、エジプト人の英文学者と多彩なのである。あとでわかったのは、彼らはKAMESのおこなったCall for Paperをみて応募した参加者であった。中国中東学会からは上海外国語大学中東研究所副所長の趙仏明氏、モンゴル中東学会からは3名の参加者があった。

2日目は開会式のあと、6つのセッション(政治2、宗教、文化と社会、言語と文学、経済各1)にわかれて研究発表が行われた。各セッションでは、3・4名の研究発表のあと、あらかじめ指名されているディスカッサントを中心に質疑が行われた。私が出席した会場では、中村さんのサウジアラビアの政治、辻上さんの同じくサウジアラビアの女性運動についての発表で専門を同じくする研究者から突っ込んだ質疑がなされた。モンゴル中東学会のLkhagvasuren氏の発表についての質疑が行き詰まると会場にいた韓国人研究者がモンゴル語で通訳を始めたのには驚かされた。Cho Hee Sun氏(明知大学)の報告は、カタル、エジプト、モロッコ、チュニジア、トルコの5カ国の家族法の現状についてアンケート調査にもとづく3年間の研究プロジェクトの報告で、古典的なイスラム家族法に対する若い世代の意識の変化を具体的に指摘した。興味深かったのはこの調査研究が、Cho先生のようなアラビストと社会学者がチームを組んで行われていることで、またこのような大型の外部資金をつかった研究プロジェクトに従事する者には大学から授業負担の軽減措置がとられているという。うらやましい話である。

閉会式では、KAMES初代会長のRhew Joung Yole氏が歯切れのよい演説で締めくくった。「今回、JAMESは若手研究者を大挙して送り込んだ。KAMESもつぎのAFMA東京大会には、若手派遣して、相互の交流を深めよう」。この発言は意味深長である。KAMESの国際会議はじつは同国の若手には敷居が高く、発表の機会がもらえないということを仄聞していたからである。このソウル会議の裏方の事務を担当し同時に流暢な英語で開会式などの司会をしていたEum Ik Ranさんは、カイロ・アメリカン大学に留学しジェンダー研究を専攻する若手研究者である。JAMESの会員でプサンの釜慶大学に着任したばかりの佐藤紀子さん(社会人類学)は、英語で講義をしているという。KAMESにもまた新しい国際交流の風が吹いていることを強く感じた。

翌日曜日の朝9時には、われわれ海外ゲストが宿泊する大学ロッジに、Lee会長が学生とともにマックのバリューセットの袋を抱えて現れた。ロッジの食堂が

閉まっていることを配慮しての会長の暖かいもてなしの気持ちのおかげで、なごやかな朝食会となった。もって、KAMES への謝辞としたい。 (三浦 徹)

### 第 14 回 KAMES 国際会議に参加して

2005 年 10 月 14 日から 16 日にかけて、ソウルの Myongji 大学で開催された KAMES 国際大会に出席した。大会は小規模ではあったが、中東とアジアから幅広い関心分野を持つ研究者が集った。出席者数は、中東、中国、モンゴルからはいずれも 2・3 名程度と少なかったが、日本からは 10 名近くにのぼった。特に、日本人の若手研究者による発表が多かったことが KAMES 初代会長の挨拶の中でも高く評価された。

印象的だったことは、小規模な学会にもかかわらず、ジェンダーやフェミニズムをテーマとした発表が私を含めて 4 件も行われたことである。このうち 2 件は中東の初期のフェミニストに着目した研究であり、私の発表を含めるもう 2 件はより現代的な関心に沿ったものであった。このようにジェンダー・フェミニズムに関するテーマが幅広く取り上げられたことは、中東研究における同分野の重要性を示しているように思われた。だが、大会ではロジ面で残念な点も残された。たとえば、私が発表する時間にもう 1 人のフェミニズム研究者の発表が別のパネルに組まれていたためにお互いの発表には出席できなかった。共通の関心分野が同じパネルにまとめられていれば、より深い議論を行うことができただろう。しかしながら、類似の知的関心を有する研究者と交流する機会を得られたことは、特に私のような若手の研究者には貴重な経験であった。

今回の大会は、私にとっては初めての国際学会での研究発表であったが、KAMES が夕食会を主催してくれたり、また JAMES からも理事・国際交流委員の方々に駆けつけていただいたのおかげで、リラックスして発表を行うことができた。主催にあたってくださった KAMES の方々と、JAMES 理事・国際交流委員の先生方に感謝したい。 (辻上 奈美江)

### 第 14 回 KAMES 国際会議雑感

東京からソウルへの旅は、韓国に行かないかぎりまず訪れることのない羽田空港国際線のターミナルを探すところから始まる。空港駅でしばしさまよい、乗り場を見つけてシャトルバスに揺られること数分。9 時 15 分発の金浦空港行きは定刻どおり離陸し、11 時半には目的地に着いていた。空港には大会開催校の明知大学で中東研究を志す学生たちが迎えに来てくれている。海外からの参加者は到着日も便もバラバラで、金浦空港に着く者もいれば仁川空港に着く者もいるという

のに、来客輸送の手配は完璧だった。事前に交わしたメールからも伺えたが、会議の裏方事務を差配する Eum Ik Ran さん、相当なキレモノであるに違いない。

英語とアラビア語のチャンポンで、三浦会長とふたり、出迎えの学生さんとコミュニケーションを取りつつ、空港からバスとタクシーを乗り継いで、着いた所は延世大学校（Yonsei University）。正門から学内へと続く緩やかな上り坂と、緑溢れるキャンパスが印象的な韓国私学の雄である。このキャンパスのいちばん奥にある宿舎が国外からの大会参加者に無償で提供されたのだが、各部屋の設備は一流ホテル並み、いやそれ以上で、KAMES のホスピタリティーにはつくづく恐れいった。06 年 5 月の AFMA 東京大会のことを考えると冷たいものが背筋を流れる。初日夕刻からの夕食会も KAMES 側の配慮でなごやかに進んだ。

2 日目はいよいよ会議本番。プログラムにはなかったが、開会式でまず三浦会長（AFMA 現会長でもある）が突然の指名に応え、即興の祝辞を述べる。AFMA 東京大会の宣伝にも努めてくれた。続いて政治に関わる 2 つの並行パネル。日本からの参加者による報告がそれぞれ含まれていたうえに、どちらのセッションも興味深かったのだが、何度か来日もされている旧知の Mohmmad El-Sayed Selim カイロ大学教授（現在はクウェート大学に出席中）と開始前に旧交を温めた成り行きで、彼の話すパネルの方に残る。このパネル、中村覚さんの発表も含めてレベルは高かったと思うのだが、残念なことに末近浩太さんの発表したパネルより発表者がひとり多かった。あらかじめ指名されていたディスカッサントからの質問・コメント以外受ける時間がなかったことは、各パネリストにとって気の毒だったかもしれない。

この日の昼食はなんとすき焼き！前夜の中国料理といい、またしても KAMES の配慮に驚かされたわけだが、地元韓国の参加者によれば「こんな甘い味付けの料理、とても食べられない」とのこと。しかし、これはこれで、多様なバックグラウンドを持つ参加者が打ち解けて話すための格好の材料にはなったようである。

午後 2 つ目は経済のパネルに出席（\* 午後最初のパネルは三浦会長、辻上奈美江さんと同じパネルに出席したので、報告省略）。一口に経済と言っても、韓国のパネリストおふたりと飯山陽さん、アレス・ファフレジャハーニーさんの発表内容はあまりにかけ離れていることが初めから明らかだったため（そもそも飯山さんの発表は「経済」じゃないんじゃない？）ご本人たちもどうなることかとずいぶん心配されていたのだが、案に相違してフロアーからの質問・コメントは日本からの報告者ふたりに集中し、多くの点をめぐって白熱した議論が行われた。中でも驚いたのは、飯山さんへの質問者のなかにムータズィラ派神学を研究する韓国の先生がいたこと。KAMES という現代研究・文学研究の印象が強かったが、実はイスラーム学者もきっちり存在することがわかったのはある意味収穫だった。

閉会式を経て、お別れの夕食会は裏方で頑張ってくれた学生さんたちも交えて

の韓国風料理ビュッフェ。国産ビールと焼酎が場を盛り上げる。延世大学の宿舎に戻ったあと、われわれがあらためてお膝元の学生街「新村」に繰り出したことは言うまでもない。焼肉、刺身、ずらっと並んだ前菜の品々に焼酎……学問的刺激を受けたうえに、韓国の誇る食まで満喫できたのだから、これはもう極楽極楽。KAMES 国際会議、個人的にはかなり病みつきになりそうな気配である。

(飯塚 正人)

### 韓国における中東研究の中のユダヤ研究 - 第 14 回 KAMES 国際会議に参加して -

私は国際交流委員として第 14 回韓国中東学会 (KAMES) ソウル大会に参加したが、大会全体の紹介および総括については三浦会長からの報告もあるので、日本の中東研究関係者にはほとんど知られていない韓国中東学会におけるユダヤ研究あるいはイスラエル研究のほんの一端をささやかな個人的関心から紹介することにしたい。

そもそもこのようなユダヤ研究について紹介しようと思いついたのは、韓国中東学会の新会長が崔昌模 (Choi Chang-mo)・建国大学校 (Konkuk University) 教授だからである。崔教授は建国大学校教養学部ユダヤ中東学科 (Department of Jewish Middle East Studies) の主任である。この学科は湾岸戦争直後の 1991 年 3 月に発足したとのことである。私が知り合ったのは、昨年 of プサンでの韓国中東学会で報告した際にセッションの議長をやっていたのが崔教授であったからである。崔教授はもともと古代イスラエル史が専門であるが、韓国における反ユダヤ主義に関する著作を韓国語で最近上梓されたと聞く。つまり、ユダヤ学のみならず、現代イスラエルをも対象に教鞭をとっているのである。

建国大学校のユダヤ中東学科は他に聖書学の崔明德、ヘブライ語学の朴美囁の 2 名から構成されている。教育カリキュラムとしては現代ヘブライ語および聖書ヘブライ語を中心にアラビア語、文化、政治、社会など広範なテーマの講義が用意されているようである。また、今回の大会でもユダヤ研究に関する報告が数本あった。これらの報告の内容についてここでは触れないが、ユダヤ研究者が日本中東学会会員としてほとんど存在しないことを考えると、日韓の研究状況の違いは顕著であるといえる。そもそも、私自身、韓国の伝統ある有力大学の一つに「ユダヤ学」を銘打った学科が存在することを聞いて非常に驚いた。もちろん、周到にユダヤ学を中東研究の一部として位置づけている意図は明確である。というのも、その学科名がユダヤ中東学科であるからである。

翻って、日本の大学には少なくともユダヤ学を専攻する学科は存在しない。もちろん、東京大学、筑波大学、立教大学などに、個別の研究者が主に宗教学関係

を中心に存在することは周知の事実である。最近では同志社大学神学部を中心に実施されている 21 世紀 COE の一神教学際研究センターにおけるユダヤ学部門が充実されつつある。

正確な統計を手元に持ち合わせていないが、韓国におけるキリスト教徒人口は一千万人超で全人口の 20% を超えている。私自身、エルサレム留学中(2000~2002 年)にかなりの数の韓国人留学生に会ったが、その多くが聖書学を学ぶ学生だった。当時のエルサレムにも韓国人コミュニティが存在し、スーク(ヘブライ語ではシュークと呼んでいたが)に行くと、白菜が手に入ったことも韓国の食材として非常に一般的であったことを示している。

少なくともこれまで日本においては現代ユダヤ研究あるいはイスラエル研究中東研究の一部として「制度化」することができていない。もちろん、東京、大阪の両外国語大学や一部の大学では聖書ヘブライ語あるいは現代ヘブライ語を学ぶことができる。しかし、地域研究としてのユダヤ研究あるいはイスラエル研究が大学で体系的に教えられることはなかった。もちろん、ユダヤ研究が地域研究であるかという問題はあるにしても、である。今回、この大会に参加して韓国のユダヤ・イスラエル研究の制度化は少なくとも日本より 15 年進んでいる事実を確認することができただけでも収穫があったと思っている。(臼杵 陽)

\* \* \*

## **The 14th KAMES ANNUAL INTERNATIONAL CONFERENCE**

**Duration: 14-16 October 2005**

**Venue: Myongji University, Seoul Campus Administration Building 3F & 5F,  
"The Middle East at the Crossroads of Change"**

### PROGRAMS

FRIDAY 14 OCTOBER 2005

15:00-17:00 Round Table Session: "The Role of the Middle East and Its Mission at the Crossroads of Change"

18:00-20:00 Welcoming Reception for Overseas Participants

Venue: Ewha Won Chinese Restaurant (Yonhee Dong)

SATURDAY 15 OCTOBER 2005

09:30-10:00 Registration

10:00-10:30 Opening Ceremony

Opening Address: Choi, Chang Mo (President of the Organizing Committee,



Konkuk Univ.)

Welcoming Address: Lee, Jong Taek (President of the KAMES, Myongji Univ.)

Congratulatory Addresses:

Chung, Kun Mo (President of Myongji University)

Rhew, Joung Yole (Professor Emeritus, HUFS)

Moon, Chung in (Yonsei University)

The Dean of Arab Diplomatic Corps

10:30-10:40 Coffee Break

10:40-12:30 Panel I: Politics I (5th Fl., Conference Room)

Mohmmad El-Sayed Selim (Kuwait University): Globalizing Security Arrangements in the Middle East

Satoru Nakamura (Kobe University): Examining the Current Political Trends in the Kingdom of Saudi Arabia

In, Nam Sik (IFANS): Prospects for Democratization in the Middle East

Weiming Zhao (Shanghai International Studies): The Middle East Peace Process: At the Crossroads - Palestinian-Israeli Track and Lebanese-Israeli Track

10:40-12:30 Panel II: Politics II (3rd Fl., Conference Room)

Suechika Kota (Japan Society for the Promotion of Science): Islamic Movements at the Crossroads: A Case of Lebanon's Hizballah

Choi, Young Chul (Honam Univ.): Democratization in Kuwait

Jang, Ji Hyang (HUFS): Globalization and the Politics of Islamic Capital: Transitions from Islamic Fundamentalism in Turkey

12:30-13:30 Luncheon (Faculty Cafeteria)

13:30-15:00 Panel III: Religion (5th Fl., Conference Room)

Amira Hassan Ahmed Nowaira (Alexandria University): Radical Islamic Thought as Represented in Zeinab Al-Ghazali's Autobiography Days in my Life

Noriko Sato (Bukyong National University): Recasting Memories of the 1915 Atrocities: Contemporary Position of Syrian Orthodox Christians in Syria

Magid Shihade (University of Washington): Communal Violence in Israel: States and Enforced Identities

13:30-15:00 Panel IV: Culture & Society (3rd Fl., Conference Room)

Cho, Hee Sun (Myongji Univ.): Islamic Personal Status Law, Possibilities of

Reform from a Women's Rights Perspective

Namie Tsujigami (University of Exeter): Emergence of Female Activism:  
Examining the Feasibility of Civil Society in Saudi Arabia

Oyunsuren Samdandash (School of Foreign Service): Relations between  
Mongolia and Middle East Countries: Past and Present

Lkhagvasuren P. (Ministry of Education, Culture & Science): Customs  
Specifications of Heap Ceremony of Khoton Ethnicity of Turkish  
Origin Nations in Mongolia

15:00-15:20 Coffee Break

15:20-17:20 Panel V: Linguistics & Literature (3rd Fl., Conference Room)

Choi, Myong Duk (Konkuk Univ.): The Independent Entity of the YIQTOL  
PRETERITE in The Hebrew Bible and YAQTUL PRETERITE in el  
AMARNA Letters

Sah, Hee Man (Chosun Univ.): Some Linguistic Features in the Discourse of  
Iraq Resistance Groups with Special Reference to al-Zargawi's JTJ

Victoria Rowe (Chou University): Masculinity and Modernity in Modern  
Middle Eastern Thought: A Study of Aleksandr Shirvanzade and Qasim  
Amin

15:20-17:20 Panel VI: Economics (5th Fl., Conference Room)

Arezoo Fahkrejahani (Tokyo Institute of Technology): Changes in Modern  
Shia World: Considering the System of Islamic Tax (Vujuhat) before and  
after the Islamic Revolution of Iran

Shim, Ui Sup (Myongji Univ.): Current Situation of Expatriates in the GCC  
Countries

Akari Ilyama (University of Tokyo): Maslaha not as Public Interest: From the  
Legal Theory of Abu al-Husayn al-Basri

Kim, Joong Kwan (Myongji Univ.): The Effects of the Rising Oil Price on  
the Korean Economy: An Analysis on the Prospects of a Short-Term  
Period

17:20-17:40 Coffee Break

17:40-18:20 Concluding Discussion and Closing Ceremony (5th Fl., Conference Room)

Closing Remarks: Lee, Jong Taek (Myongji Univ, President of the KAMES)

18:20-20:30 Dinner (University Restaurant)

SUNDAY 16 OCTOBER 2005

10:00-12:00 Forum: Cooperations between Korea and the Middle East

12:00-13:30 Luncheon

13:30-16:00 Cultural Events

## 日本における中東教育研究機関アンケート調査の実施

日本中東学会理事会では、国際交流基金の委託をうけて、日本における中東教育研究機関の現状調査を行うことにいたしました。本学会ではすでに、2002年度に社会科学研究評議会（ニューヨーク）と連携し、日本における中東研究の現状調査として、本学会員の動向調査を行い、日本における中東研究者の動向を国内外に明らかにすることができました（AJAMES 19-2号に英文報告を掲載）。本調査はその補充調査にあたるもので、研究や教育を担う機関の現状を知ることが目的で、アンケートによる調査としてはじめてのものになります。

調査データは、集計整理のうえ分析を加えて報告書を作成するとともに、今後の学会などの研究教育活動の基礎データとして保存・使用していく予定です。

本調査にあたっては、学会会員のデータから中東に関わる研究を実施していると思われる教育・研究機関をリストアップし、アンケートを当該機関ご所属の会員にお送りしました。回答締切（教育機関 2005/12/26、研究機関 2006/1/9）までに約100の機関から回答をいただき、整理・集計作業にはいりました。ご協力に感謝いたします。国際交流基金への最終報告書の提出は3月を予定しております。

（三浦 徹）

## 追悼 ダードさんのいないダマスクス

2005年8月、カイロからダマスクスに到着した私は、さっそくダード・アルハキムさんのお宅に電話を入れ、いちどお目にかかりたい旨をお伝えしようとした。ところが電話口に出られたご主人によれば、ダードさんはすでに病気で亡くなられたとのことであった。私が最後にダードさんとお会いしたのは、2001年11月に「第6回ピラード・アッシュームの歴史国際会議」がダマスクス大学で開かれた時のことなので、それからもう4年近くが経過していたことになる。後で三浦徹さんが確かめてくれたところによると、2005年の6月1日、心臓の手術中に突然亡くなられたのだという。ダードさんは1936年10月の生まれなので、まだ68歳の若さであったことになる。

ダードさんは、1958年にダマスカス大学文学部を卒業され、77年にカイロのアイン・シャムス大学文学部で修士号を取得された。修士論文のタイトルは、「法廷文書から見た1267/1851年アレppoの社会・経済生活」であった。帰国後の81年からスーク・サールージェにある「ダマスカス歴史文書センター」所長に就任し、それから20年以上もの間、古文書の保存・整理・閲覧業務の重責を果たしてこられた。日本人研究者との間に親しいつき合いが始まったのは、84年4月半ばから1ヶ月間、ダードさんを日本にお呼びし、東洋文庫を中心にして古文書に関する講演会や文書の講読会を開いてからのことであった。以来、三浦徹、大河原知樹、五十嵐大介さんなどの若手研究者（当時）は、ダードさんの暖かい庇護のもとで安心して文書調査に取り組むことができたのである。日本人によるシリア史研究が着実にそのレベルを上げることができたのは、大の親日家であったダードさんの好意と庇護によるところが少なくないと思われる。

ダードさんのいないダマスカスは、とても寂しくもの悲しい。私は文書センターの古めかしい部屋を訪ね、トルコ・コーヒーをごちそうになりながら、シリアや日本の先生のこと、ジャバラの町のこと、あるいは聖者スルタン・イブラーヒムのことなどについて、あれこれと雑談するのが何よりも楽しみであった。ダードさんのいないこの空白をどうして埋めたらいいのか、いまだによく分からない状態が続いている。せめて若い研究者が、ダードさんに代わる新しい、有力な庇護者を見つけてくれたらなあと思っている。（佐藤 次高）

学会への入会を希望される方は、学会ホームページの「日本中東学会について」をご覧ください。学会概要、会則、入会案内が掲載されており、入会申込フォームをダウンロードできます。また、学会事務局までご連絡いただければ、入会案内と申込フォームをお送りすることもできます。

## 寄贈図書

### 【単行本】

奥田敦著『イスラームの人権：法における神と人』慶應義塾大学出版会、2005。  
未近浩太著『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版、2005。  
長場紘著『イスタンブール 歴史と現代の光と影』慶應義塾大学出版会、2005。  
堀口松城著『レバノンの歴史 フェニキア人の時代からハリリー暗殺まで』明石書店、2005。

吉村慎太郎著『イラン・イスラーム体制とは何か 革命・戦争・改革の歴史から』書肆心水、2005.

『同志社大学 21 世紀 COE プログラム 一神教の学際的研究 文明の共存と安全保障の視点から 2004 年度研究成果報告書』同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2005.

#### 【逐次刊行物】

al-Bahrayn al-Thaqafa, Vol. 35, 2003.

Bulletin of the American Research Center in Egypt, No.188, Cairo: American Research Center in Egypt, 2005.

Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Vol.68, No.2, 3, London: Cambridge University Press, 2005.

『CISMOR VOICE』No. 3、同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2005.

『季刊アラブ』vol.115、日本アラブ協会、2005.

Newsletter, No. 67, Istanbul: O. I. C. Research Center for Islamic History, Art and Culture, 2005.

Islam Ansiklopedisi, vols.24-30, Istanbul, 2001-2005.

### 2006 年度会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。本年 1 月 10 日現在で未納の方には、本号ニューズレターに郵便振替払込用紙を同封させていただいておりますのでご利用ください。2005 年度以前の会費を未納の方はどうかお早めにお支払ください。未納分の払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。年次大会での研究発表および AJAMES への投稿には、当該年度の会費納入が条件になります。なお、3 年以上会費を滞納された場合は会則により会員から除名される場合がありますので、ご注意ください。

### 事務局より

・本号トップ記事でお伝えしておりますように、第 11 期理事会は来る 5 月の年次総会で会則改正を提案する予定です。この件につきまして、会員の皆さまの忌憚のないご意見・ご提案を是非ともお寄せください。2 月末日までにメールまた

は FAX で事務局宛てにご送付いただければ幸いに存じます。皆さまのご意見・ご提案を受けて、理事会はさらに本件に関する議論を重ね、年次総会に向けた最終案を固めて参ります。

・理事会による会則改正提案のうち、会費値上げに関わる資料として、本号ニュースレターには「日本中東学会の財務状況」を別紙で同封しております。こちらでもご参照いただければ幸いです。

・また、本号ニュースレターには、来年度年次大会の参加費、懇親会費、弁当代、託児所への寄付のための郵便振替用紙も同封させていただきました。それぞれの金額・振り込み締切等については 5～6 ページをご覧ください。

・4 月から日本中東学会年報 (AJAMES) の投稿先、連絡先が変わりますのでご注意ください。詳しくは 19 ページをご参照ください。

・繰り返しになりますが、来年度年次大会時に開催される年次総会では会則改正が議題に上る予定です。来る 5 月の総会は例年以上に重要な総会になると思われますので、皆さま万障お繰り合わせのうえ、ご出席ください。アジア中東学会連合 (AFMA) 東京大会も同時開催されております。東京外国語大学で皆さまのお越しをお待ち申しあげております。

(飯塚 正人)

**日本中東学会ニューズレター 第106号**

発行日 2006年1月30日  
発行所 日本中東学会事務局  
印刷所 東洋出版印刷株式会社

**日本中東学会事務局**

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1  
東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所  
飯塚正人研究室気付  
TEL & FAX 042-330-5543  
Eメール：james@aa.tufs.ac.jp  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>  
郵便振替口座：00140-0-161096  
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店  
普通 No. 5346808